

平成17年度試験研究成果書

区分	指導	題名	規模拡大に向けた和牛繁殖経営の実態と課題	
<p>[要約] 和牛繁殖経営の規模拡大開始後2年間は、生活費の確保が課題となることから自己資本の蓄積に努め資金繰りに留意する必要がある。また、規模拡大後の収益性を確保するために、稲ワラや低未利用地の地域資源の利用、粗飼料栽培面積の拡大、公共牧場の活用など粗飼料確保の展開を図ることが重要である。</p>				
キーワード	和牛繁殖	規模拡大	経営管理	企画経営情報部 農業経営研究室

1 背景とねらい

和牛繁殖は水稻との部門複合の経営体が多く、近年の米価低迷の中にあっても、和牛子牛価格が堅調なことから和牛部門の拡大による所得確保が期待される。こうしたことから、和牛繁殖経営の実態を踏まえ和牛繁殖の規模拡大に向けた課題を明らかにする。

2 成果の内容

(1) 規模拡大上の課題(表1・図1・表2)

ア 20頭規模から30頭規模へ拡大し他産業並の所得確保を目指す場合の経営収支を、調査農家の実態を踏まえて試算すると、収益を上げるまでの2年間は現状よりも所得が減少し生活費確保が課題となるため、自己資本の蓄積に努め資金繰りに備える必要がある。

イ 規模拡大資金を全額借入した場合、年間111万円の支払いが生じるので投資時期の分散や施設の低コスト化に留意する必要がある。

ウ 粗飼料基盤を拡大するケースと拡大できないケースでは所得差が年間81万円生じるので、収益性を確保するために自給粗飼料の確保が重要である。

(2) 規模拡大に伴う粗飼料基盤展開上の課題(図2)

調査農家の飼養頭数と粗飼料基盤の展開過程を模式化すると、それぞれの展開段階における課題は次のとおりである。

図2 符号	粗飼料確保段階	農家					課題
		頭数	A	B	C	D	
	稲作副産物活用段階 (稲ワラ、水田畦畔草)	25	39	42	37	95	・耕畜連携の推進
	水田転作・畑活用段階 (採草、トウモロコシ、ソルガム)						・ベールラッパ体系導入 ・粗飼料栽培面積拡大 ・機械の共同利用 ・コントラクター育成
	低未利用地活用 (水田放牧、遊休地・林間放牧)	-					・簡易電牧技術の普及
公共 牧場	夏期放牧活用段階	-	-				・公共牧場夏期放牧推進 ・キャトルセンター整備
	冬期預託活用段階	-	-	-	-		

注： は現在該当するもの、 は水田をすべて転作しているもの、 は予定しているもの

(3) ベールラッパ体系による生産コスト(図3)

ア 粗飼料確保の展開段階において、自らの基盤で生産するベールラッパ体系導入と粗飼料栽培面積の確保が重要となる。同体系による粗飼料(牧草)のTDN1kg当たりの生産コストは、5ha(20頭規模)で85円/kg、7.5ha(30頭規模)で69円/kg、12.5ha(50頭規模)で56円/kgであり、4ha以上では購入乾草の99円/kgに比べ安価に生産可能である。

イ 低コスト生産に向け栽培面積の拡大や機械の共同利用、コントラクターの育成を図ることが重要である。

3 成果活用上の留意事項 特になし

4 成果の活用方法等

(1) 適用地帯又は対象者 和牛繁殖農家(県下全域)

(2) 期待する活用効果 和牛繁殖部門の規模拡大による他産業並所得の可能な経営体の育成

5 当該事項に係る試験研究課題

(H17-01)「和牛繁殖を基幹とする経営体の成立条件の解明」(H17~H19, 県単)

6 参考資料・文献

企画経営情報部、関係部(所)(2005)「生産技術体系の策定」岩手農研セ成果

7 試験成績の概要

表1 和牛繁殖農家の経営概要

市町村	規模	複合部門		牛舎及び拡大方式			粗飼料確保						
		繁殖牛(頭)	肥育牛	水稲(a)	牛舎増築回数 主な低コスト化	主要牛舎 (建設年)	牛の増頭	繁殖以外の 主な資金源	飼料圃場 以外の確保	採草(a)	収獲体系 (開始年)	その他	自家 放牧
A 遠野市	成23 育2	黒2	620 受託15h	4 パイプハウス	繋ぎ牛舎 (H11)	自家保留	水稲	稲ワラ	600	ラップ (H12)	-	-	-
B 江刺市	成35 育4	黒100	490 受託5ha	2	繋ぎ牛舎 (H9)	一挙(H9)	水稲 和牛肥育	稲ワラ(肥育), 水稲6haの畦畔草	720	ラップ (H15)	スダシ 10a	田150a (H17)	-
C 江刺市	成33 育9	0	170	6 外コ舎,自力	群飼牛舎 (H13)	自家保留	兼業収入	稲ワラ,稲ICS270a 集落の畦畔草	600	ラップ (委託)	トゲロシ 50a	設計中 (H17)	夏期16頭 (H14)
D 一戸町	成35 育2	黒5	リド920 (H9全転作)	3 外コ舎,自力	繋ぎ牛舎 (H8)	自家保留	兼業収入	-	900	ラップ (H13)	-	裏山 (H8)	夏期10頭 (H12)
E 胆沢町	成85 育10	黒4	(牧草230) (H17全転作)	5 パイプハウス	群飼牛舎 (H13)	自家保留	水稲 兼業収入	稲ワラ(自家産なし)	1,790	ラップ (H2)	刈がム 100a	林間 (H17)	夏期(S57) 周年30頭(S60)

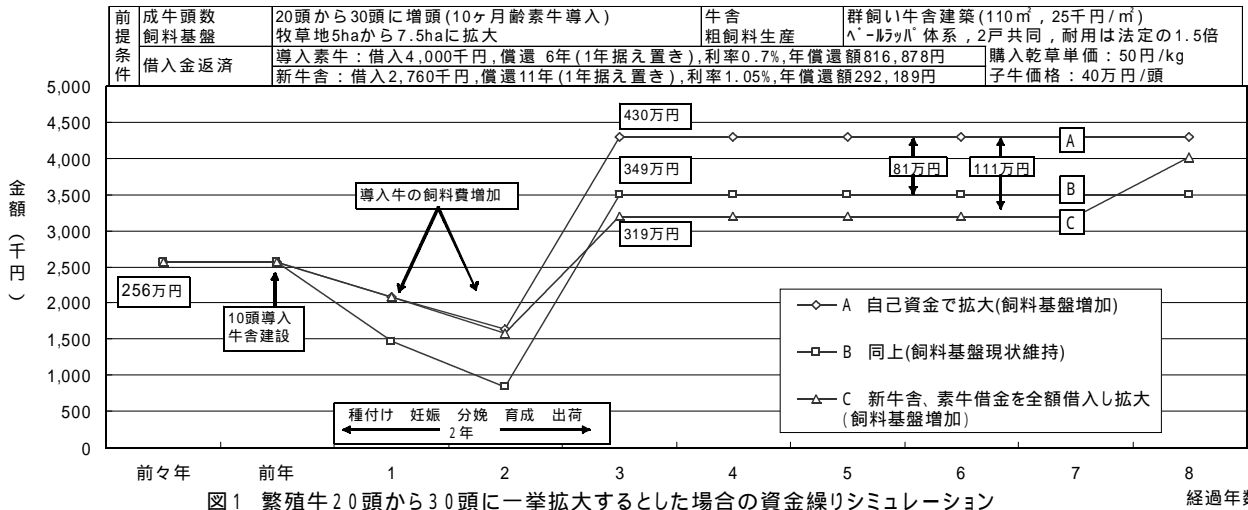


図1 繁殖牛20頭から30頭に一挙拡大するとした場合の資金繰りシミュレーション

表2 規模拡大上の課題と農家の対応

	課題(図1)	調査農家の対応(表1)
生活費の確保	規模拡大から当初2年間は、濃厚飼料費が増加し所得が減少	水稲や肉牛肥育部門、兼業収入などを充当
借入金の削減 (素畜費) (牛舎費)	自己資金で拡大したAと全額借入金のCを比較すると、返済開始後の5年間の差は毎年111万円	素牛の自家保留を基本に徐々に増頭 たばこ舎の改築、パイプハウスの利用、自家施工など経費を抑え段階的に拡大
粗飼料基盤の確保 (粗飼料費)	増頭に合わせて自給粗飼料生産を拡大するAと乾草を購入するCを比較すると、毎年の所得差が81万円	副産物の調達、借地拡大、自家放牧、公共牧場利用など発展段階に応じ活用

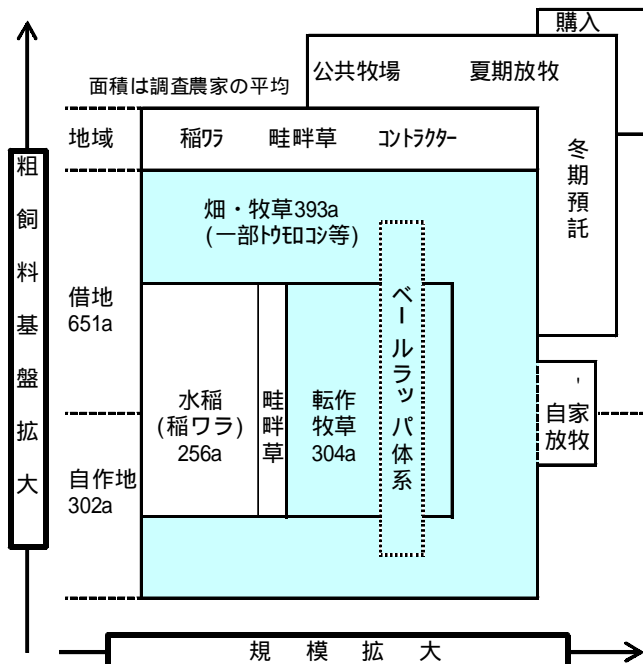


図2 規模拡大に伴う粗飼料基盤の展開

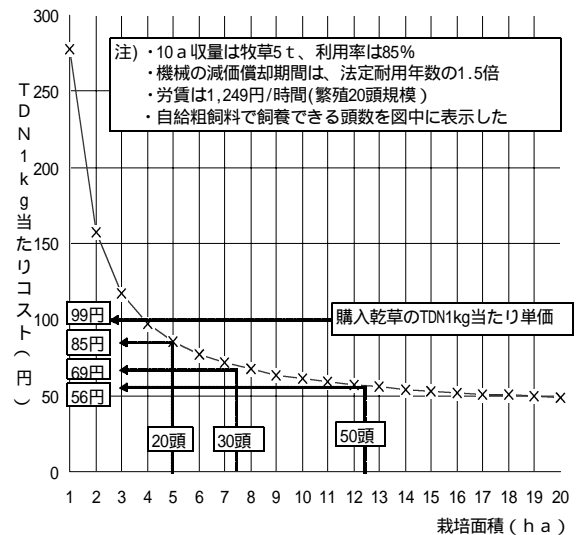


図3 ベールラップ体系による生産コスト